

序

持統天皇8年（694）12月、持統天皇は飛鳥の地を離れ、藤原宮の大極殿で朝政を執り行いました。ここに、天武天皇が計画したものの、天皇の死去などにより一時中断していた藤原京への遷都がなされました。

藤原京は、条坊制を備えた日本最初の中国式都城です。その規模についてはさまざまな議論がなされてきましたが、現在では東西・南北が5.3キロメートルにも及ぶ、大規模なものであったと考えられています。京内には、寺院、貴族の邸宅や庶民の家、宮外官衙などが置かれていました。

奈良文化財研究所は、藤原宮の継続的な調査を計画的に進めてきました。これまでに調査した面積は宮域全体の約12パーセントと、まだ十分なものではありませんが、大極殿院、朝堂院の中枢部をはじめ、官衙地区においても多くの事実を解明することができました。

一方、藤原宮の調査と並行して、藤原京の調査も実施しています。本書で報告するのは、飛鳥藤原宮跡発掘調査部（現都城発掘調査部 飛鳥・藤原地区）の新庁舎建設に伴い、1986年から87年にかけて左京六条三坊で実施した発掘調査です。左京六条三坊の地は、藤原宮東南隅部に東接する、京内でも一等地にあたります。調査の結果、古墳時代から中世にわたる多数の遺構を検出し、当地が長期にわたって活発に土地利用されていた状況が明らかになりました。

特に、藤原京期には四町にわたる敷地を有する、大規模な施設が存在したことが判明しました。これは寺院以外では複数町占地を明らかにした初めての例で、以後、同様な事例が確認されていきます。この施設の性格は、今回の分析・検討により、当初は京師の民政を司った「京職」、次いで「左京職」に変わることが明らかとなりました。また、奈良時代にも大規模な施設が存在したようで、「香山」と記された墨書土器のまとまった出土が注目されます。

今回報告する発掘調査成果が、今後の藤原京の調査研究の基礎資料として活用されることを期待いたします。

最後になりましたが、調査の実施にご協力をいただいた奈良県教育委員会と橿原市教育委員会、発掘調査のご指導とご助言をいただいた皆様と、関係諸機関に厚く感謝申し上げます。次第です。

2017年3月

奈良文化財研究所
所長 松村恵司